

日本総研主催シンポジウム
強い経済と社会保障をどう両立するのか—スウェーデンの「改革」に学ぶ—
後援/スウェーデン大使館

講演「スウェーデン・モデルを考える」

神野 直彦氏(東京大学名誉教授、政府税調専門家委員会委員長)

1. オムソーリとラーゴム—個人尊重主義と連帯主義のバランス

このような席にお招きをいただきましたことに、まず御礼を申し上げます。ヌーデルさんの教えを受ける機会を得たことに深く感謝しますが、先ほど大使から過分なお言葉をいただきました。私はスウェーデンの研究者のエキスパートではなく、全くの素人です。素人なのですが、ただスウェーデンが好きだというだけの話です。

私はドイツの財政学を学んでおりまして、ドイツの財政学という観点から、スウェーデン・モデルを考えてみたいと存じます。スウェーデン・モデルを解説するよというお話だったので、ドイツ財政学の観点からそうした話を最初にさせていただきます。

お手元にあるレジュメに、冒頭に『スウェーデン・モデル』を考える』とあるレジュメを見ていただければと思います。

私は、最近『分かち合い』の経済学』という本を書いて、この中で今の歴史の大きな変換期を越えるための重要なキーワードは、スウェーデン語で言っている「オムソーリ(omsorg)」と「ラーゴム(lagom)」であると。「オムソーリ」というのは、社会サービスという意味で、同時に「悲しみの分かち合い」がもともとの意味だと聞いています。もう一つ「ラーゴム」は、日本で言うと「中庸の徳」と言った方がいいかもしれません。つまり、個人主義の尊重と連帯主義をうまくバランスさせていくことが鍵になるだろう。これは財政学の立場から言いますと、私の財政学の講座の前の担当者である大内兵衛先生が言われた有名な言葉、「人間は自立すれば自立するほど連帯する」という言葉を意味しています。こうした自立と連帯のバランスが、スウェーデン・モデルの基本にあると考えます。

2. 「希望の島」としてのフォルクヘメット

スウェーデン・モデルはいつできたのか。私の考えでは、1932年にハンソン首相が掲げた「フォルクヘメット(Folkhemmet)」、「国民の家」のビジョンです。1929年の世界恐慌があった後、社会民主労働党が初めて単独で政権に就きます。そのときに国民に対してハンソンは「国民の家」というビジョンを出します。「国家は家族のように組織化されなければならない。家族の構成員はどんな傷害を負ってしようとも、家族のために献身しようと思っている」。誰もが国民のために貢献したいと思っている切なる願いを残酷にも打ち砕く、それが失業なのだという考え方に立っていると理解しています。

しかも、こうした政権ができていく背後にあるのは、1931年に起きた「オーダレンの血の代償」です。先ほどのヌーデルさんの議論では、スウェーデン・モデルの重要な特色は、強い労働組合ということにあ

り、それは連帯の組織化を示していると思います。これは、日本とは全く違うということです。スウェーデンの労働組合の組織率は 98%にも達するのに、日本では 20%を切り、影響力が全く異なっています。日本の労働組合は、血の代償を払っていない。「オーダレン」というのは、町の名前です。

同時に、「ロンドン・エコノミスト」は、この 1932 年から取った政策に対して、「世界恐慌という絶望の海に浮かぶスウェーデンは希望の島である」とたたえました。私はそのために、『「希望の島」への改革』という本を書いたことがあります。実は 1929 年の世界恐慌から脱出する過程が、ほかの先進国と違っていた国が 2 カ国あります。

一つはスウェーデンですが、もう一つはスイスです。どこが違うのか。ほかの国々は戦争の準備と戦争によって、1929 年の世界恐慌から脱出したのです。この 2 カ国だけ違った。これがあとのスウェーデン・モデルに決定的な影響を与えていると考えています。それは、中央集権的ではないのです。総力戦を戦おうとすると、どうしても中央集権的に経済動員をせざるを得ない。そこが完全に履歴効果として違っています。つまり、スウェーデン・モデルの第二の特色は、分権的組織にあります。

3. 19 世紀後の大不況における三大国民運動、協働組合運動、国民教育運動

さて、実はその前からスウェーデンは、このスウェーデン・モデルの原型を作る努力をしています。新しい時代は、必ず危機のときに生まれます。危機の乗り越え方で、次の社会ができていくということです。

1929 年の世界恐慌の前には、19 世紀末の 1873 年、ウィーン株式市場が暴落して以来、26 年間にわたって、世界的に物価が下がり続けるという、Great Depression が起きました。先ほどのヌーデルさんのお話では、そのときにはスウェーデンは大変貧しい国家になってしまった。私の記憶が正しければ、スウェーデン国民の 3 分の 1 が、貧しさに耐え兼ねてアメリカへ移民をしてしまいます。そのときに、スウェーデン国民は、国民運動を起こしてくるのです。労働組合運動もそうですし、生活協同組合、さらに重要なのは、日本人はできないだろうと思いますが、禁酒運動、それから教会運動、そして教育運動です。みんなで勉強し合おうということは、現在でも生きています。学習サークル、それから国民大学、国民高等学校という制度を、働く者たちが働いた後、勉強するために作り上げていく。この時点で、世界で義務教育の非常に進んでいた国というのは、スウェーデンと日本です。

その後が違います。高等学校の教育、つまり後期中等教育ですが、高等学校の進学率を上げていくことは、日本は上から政府がやりますが、スウェーデンは、先ほども言いましたように、下からの運動で引き上げていった。この極貧の中から、スウェーデンはノーベル賞を作っていくということです。信じられないことです。こうした下からの運動ということを三番目にスウェーデン・モデルの特色として指摘したいと思います。

4. 総力戦の体験なき「黄金の 30 年」

そして、第 2 次世界大戦後に、世界の国々は経済発展をはじめますが、ここでは第 2 次世界大戦という総力戦をどうやって戦ったのかというのが決定的になります。国内的には経済統制、そしてあの第 2 次世界大戦の悲劇を起こさないために、世界的に自由に多角的な貿易構造を作ろうとして、ブレトン・ウッズ体制を作るわけです。しかし、中央集権的な所得再分配を国内ではやりながら、資本が自由に動く

ことは統制して、固定為替相場制度ででき上がっていた通貨制度が、つまり世界的な自由貿易と国内における所得再分配国家を両立させるための制度が、ブレトン・ウッズ体制だと申し上げていいかと思えます。

フランスの経済学者の言葉で、第2次世界大戦後を「黄金の30年」と言っていますが、スウェーデン・モデルの「黄金の30年」は、他の国と違って、総力戦の体験なき「黄金の30年」だった。この履歴効果が、この次にお話ししますが、中央集権的ではなくて、地方分権的に、国民の下からの運動によって作り上げていく、お金をただ単に配ることでない社会保障制度ができ上がった要因なのではないかと思っています。

先ほどの「強い経済」「強い社会保障」「強い財政」は、ほかの人も言っているのかもしれませんが、私が作った言葉です。今日ご出席いただいた峰崎副大臣と一緒に、菅総理の前で説明していますが、私が説明したのは、「強い財政」と「強い社会保障」というのは、1997年だったと思いますが、私が著書をまとめる時に、スウェーデンの予算書を調べると、「強い財政」と「強い社会保障」という言葉が出てきたのです。「強い経済」は出てきません。出てこないのですが、私はスウェーデンが1990年代に成功した秘密は、産業構造を大きく変えたからで、「強い経済」とは産業構造の転換を意味しています。

産業構造の転換をするためには、国民に安心して冒険させなくてははいけません。そのためには、今までのような社会保障、つまり安全のネットだけではなく、活動保障をも含める必要がある。生活保障だけではなく、activation、先ほどのソーシャルブリッジ、日本語で言うと「社会の架け橋」、それに通じることを「強い社会保障」と呼んでいます。つまり安心して新しい産業構造に変えていくために、チャレンジさせなくてははいけません。そういう新しい産業構造にチャレンジするためには、強い保障が必要なだけけれども、そのためには、強い財政が必要だという論理になっているというのが私の主張です。ですから、「強い経済」と言ったときに、量的な「強い経済」を意味していません。

日本は、皆さんもご存じのとおり、1902年から1980年まで、「いざなぎ越え」、日本の歴史が始まって以来、空前の、大田大臣が責任者でいらっしゃったときもあるので、大田大臣に怒られるかもしれませんが、空前の経済成長の持続をするのだけれども、結局は賃金の減少と格差と貧困をあふれ出させただけだった。そういう経済成長は必要はないということを主張していますので、今言ったような論理で、私の場合には使っているということを、最初にお断りして、あとでおいおい説明したいと思っています。

以上